たが實家内山氏は今尚存續し、東京市下谷區御徒町に住んで居られる筈である。

孝和の二百年忌に當る明治四十年には畏くも贈從四位の恩命があり千古不朽の業績を追賞せられた。

3. 鹽原太助

江戸時代の泰平も次第に頽廢の兆を見せた將軍家治の頃、「本所に過ぎたるものが二つある。津輕屋敷に炭屋鹽原。」と謳はれた大江戸屈指の豪商鹽原太助の眞面目は、終始一貫至誠を以て家業に勵み、親切と信用とを第一として貯蓄に心を用ひ、産を積むに及んでは公共事業に盡力し、我が國近世に於ける商人道の達成を身を以て實踐したところにあつた。

太助は寛保3年2月3日(今より約2百年前)利根郡新治村下新田の農家に生れた。七歳の時母を失ひ、十五歳にして父に別れ、其の後は情の薄い繼母の下に涙の日々を送つてゐたが、十九歳の時、繼母が太助を害せんとするにあひ、溫順な彼も飜然決意するに至つた、七歳の時買入れた愛馬「あを」に別れ、懐しい生家を離れることは若い太助にとつてどんなに辛いことであつたらう。江戸に上つた太助は奉公口を探すにも術なく請人なくてはと斷られ、萬策盡きて遂に神田昌平橋から身を投げようとした時圖らず助けて呉れた人が佐久間町の炭商山日屋善右衛門であつた。それより山日屋の家僕となつた太助は、朝は星を戴いて起き夜は人聲の鎭まるを待つて床に就くといふ至誠と忠實とを以て主家に盡し、一本の絲屑もかりそめにせず、貯蓄に心がけた結果、朋輩にも重寶がられ主人の信用は厚くなる一方であつた。

太助は山日屋に奉公すること22年、その間の給金75兩を全部主人に預けたまゝ、裸一貫で本所相生町にさゝやかな炭屋を開業した。

山日屋に居つた時と同樣、勤儉力行、眞黑になつて働く太助の前にやがて一つの珍事が湧いた。當時加賀の前田侯のお金御用を勤めてゐた豪富藤野屋の一人娘お花が太助の許に嫁したいと願つた事である。餘り唐突な緣談に耳も藉さなかつた太助であつたが、お花が友禪の振袖の袂を惜し氣もなく斷ち切つて夫婦共稼ぎの覺悟を示したので、目出度く緣を結んだ。その時太助は42歳であつた。かくする中に彼の信用はいよ々々加はり、炭問屋仲間の評判も高まり瞬く間に身代は伸びて行つた。數年にして382兩で家屋敷を買ひ求め、遂には千兩屋敷を七屋敷も手に入れるやうになり、公儀の御用を勤める程の身分となつた。

山日屋奉公中、獨力で本郷湯島の無緣坂を改修した太助は業成つて後嘗て自分が新治村を出て江戸に向つた時の難儀を思ひ出して、故郷に近い中山村の反峠に溫茶の接待所を設け、(此等の費用に關する請取通帳は今も生家の近隣原澤家に殘つて居り、又その際の接待茶釜は利根郡薄根村恩田の高橋氏宅に保存されてゐる。)又榛名湖畔天神峠に常夜燈を建立した。讃岐琴平神社に御禮參りをした際は、多度津に高さ二丈餘の青銅の大燈籠を寄進して近海通航船舶の便宜を圖つた。太助の慈愛同情は動物に迄及び、東海道箱根峠・中山道碓氷峠などの難所にも接待所を設けて駄馬に毎日一頭三合宛の大豆を與へしめたといふ。外に向つて公共の爲に盡した彼は内に向つてもよく家政を整へ、子女を育み圓滿な家庭を作つた。殊に昔日自分に辛かつた故郷の繼母に對して孝養を怠る事なく、享和3年繼母88歳の時には、之を江戸に招いて盛大な米壽の賀宴を張り、同時に記念として故郷の貧困者に救恤の金員を惠んでゐる。彼は又一度故郷に歸つて下新田の生家を改築し、親戚故舊を招いて祖先の法要を營んだ。現存する家屋土藏等は其の折のものである。

太助は老後風流文雅に心を寄せ壽山と號して俳諧狂歌を能くした。

江戸中のすみから炭のうり初め
　　けふ山日の日をひらいて　　多　助
鶴の千代龜のよろづよつぎたさん
　　八十八を數とりにして　　壽　山

光格天皇の文化13年閏8月14日、77歳で病歿し、江戸淺草高原町東陽寺に埋葬された。法名。鹽原壽算居士、遺髮は下新田に送られて祖先の塋域に埋められ、其の碑石は往還の人の敬慕の的となつてゐる。